

## デカルトにおける「魂」と「身体」

——<動物機械論>再考——

三上航志 (京都大学)

デカルトにおいて、「真なる人間 (*un vrai homme*)」とは「精神 / 魂 (*mens, esprit / anima, âme*)」と「身体・物体 (*corpus, corps*)」が緊密に結合した実体的合一として捉えられる一方で、動物は精神・魂の欠いた、純粋な身体＝機械として捉えられている。すなわち「かりにサルか何かほかの、理性を持たない動物の器官や外形を持った機械があるとするなら、その機械があらゆる点でこれらの動物とは本性を異にしていると認めるいかなる手段も我々にはない」のである (AT, VI. 56.)。しかしながら、当然のことながら人間も有機体として動物的生を営んでいる存在であり、動物と人間との間の連続関係を否定するのは難しいだろう。

ここで解釈史に目をむけるならば、例えば M. ゲルーは、人間と動物の間に大きな「裂け目」を見出し、「魂によって形相付けられた人間の身体」(つまり「実在的結合」と、「物理的世界の他のあらゆる物体」(つまり「実在性を欠いた不安定な結合」)の両者を区別する。前者は、無限に分割しうる物体的な諸部分の集合であるのだが、魂によって形相付けられているのであって、これには、魂が身体の究極的な先端に至るまで浸透することによって、「内的目的性」が与えられている。このように、人間において魂は、身体全体のあらゆるところに、一なる全体として、存在しているとされ、人間がもつ概念や反応の合目的性は、身体が魂によって形相づけられることによって説明されると、ゲルーは考えるのである。他方、後者は、無際限に分割されうるものであり、神によって設定された自然法則に従って運動するため、「内的目的性」を持たない諸器官の集合に過ぎない。従って、動物とは、人間とは大きく異なり、必然的な運動を成しているだけに過ぎないのだ。このように、ゲルーは人間と動物の間に大きな「裂け目」を設定し、その契機として人間がもつ「魂」の役割を強調するのである (Gueroult, *M. Descartes selon l'ordre des raisons*, tom II, Paris, Aubier, 1953 ; 1975. pp. 195-218.)。

しかしながら、ゲルーは、このように人間と動物の間に大きな断絶を置きいれながらも、「動物の身体」と「人間の身体」の間にある生理学的違いに訴えて先の「内的合目的性」を説明することはなく、身体に合一した魂は、身体の構造や器官の配置を変化させることさえない、と認めてしまっているように思われるのである。つまり、ゲルーは両者の断絶を宣言しながらも、その生理学的な根拠を明らかにしていないのである。

実際このゲルーの解釈に対してはいくつかの批判が挙げられており、例えば、G. ロディス＝レヴィスは、人間と動物の間にデカルトは一貫して連続性を認め続けていたと主張し、先のようなゲルーの解釈を厳しく批判し、動物と人間の間にある、理解不可能な裂け目、すなわち「計り知れない神秘」を結論することを拒否する。つまり、彼女によれば、デカルトは、動物は魂を持っていないことを主張する時であっても、最も基礎的な有機体に言及しているものであり (AT, IV. 526.)、また、デカルトは生命の発生についての論考を進める際に、人間については十分な知見がないために「動物一般」につい

ての研究に専心したのであって (AT, V. 112.)、人間の内に認められる内的合目的性を認めるテキストは、実は、一なる全体として捉えられる有機体の全てに適用可能であると、ロディス＝レヴィスは指摘するのである (Rodis-Lewis, G., *L'anthropologie cartésien*, Paris, PUF, 1990. pp.148-167.)。

同様に、D. ドゥルールは、「実際、身体は常に魂と結合しているのだが、しかしこの、経験的に定義可能な、事実的な合一は、身体という概念自身もつ両義的な地位に関する問いを提起せずにはおかない。従って、身体を純粋な機械として分離し、それを自動的な仕方でも取り扱うことができるのは、権利上の視点にたったのみ、なのである。デカルト主義が考慮に入れるのは、この権利上の分離なのである」と明確に述べ、デカルトの主張する身体＝機械論とはあくまでも理念的なものであって、実際の動物は、機械として人間と断絶したものとして捉えられるどころか、人間との連続性の内に捉えられ、この限りでは動物に魂の寄与を認めうる地平をも切り開いているのである。(« Vivant-machine et machine vivante », in D. Deleule et F. Guery, *Le corps productif*, Tours, 1972. p. 62.)

そしてこのような解釈は D. カンプッシュネルの解釈にも引き継がれ、カンプッシュネルも、人間身体は「魂」の寄与がなければ完全に自己保存の運動を展開することができないことを強調し、ゲルー的に解された動物＝機械論の訂正を迫るのである。(Kambouchner, D., *L'homme des passions Commentaires sur Descartes*, tom, I, Paris, Albin Michel, 1995. p. 158.)

このように、デカルトにおける「身体」と「魂」をめぐる問題は、世界に生息する諸々の有機体の間に、どのような断絶と連続を見出すべきなのか、という問いとなって立ち現れてくるが、本発表ではこのような問題に対して『人間論』、『方法序説』第五部、『情念論』、そしてさらには『人間身体の記事』やニューキャッスル宛て書簡など、デカルトの人間身体および動物機械論に関するテキストに緻密に身を配り、また上記の解釈を批判的に検討することを通して、デカルトの体系において人間と動物の間にはいかなる断絶と連続を見出すべきなのかを、今一度考え直したいと思っている。